
すぴんおふ！

ふっしー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すぴんおふ！

【Nコード】

N7768Y

【作者名】

ふっしー

【あらすじ】

金曜日の放課後。恋焦がれる高校生、里美公太は屋上で告白をした。しかしその告白は失敗に終わる。なんと今年で四連敗。それも決まって「あなたは違う」と言われてしまう。告白失敗に呆然とする公太の前に現れた黒い巫女服の女の子。彼女の名前は朱夏。縁結びの神を奉る巫女だという。朱夏が語りだした公太の告白失敗の理由。それはなんと公太の主人公時間が無くなったことであった。主人公時間とは、文字通り人生の間で人が主人公になっていられる時間。その時間でなければ恋愛は成功しない。つまり公太は二度と

恋愛が出来ない体になってしまっていたのだ。だが、主人公に戻る方法が一つだけ存在すると朱夏は語る。その方法とは『他者の物語に脇役として登場すること。脇役が他の主人公にとって、重要な存在となり人気者になれば、スピンオフとして主人公に返り咲けることがあるというのだ。この話を聞いた公太は、巫女の朱夏、親友の優と共に、主人公に戻るために名脇役になることを決心する！脇役視点で物語を描く学園ラブコメディー！

プロローグ

「俺と——付き合ってください……！」

……ふふふ……、完璧だ……！！

金曜日の放課後。

一週間の中で最も気の緩むこの時間帯に、俺こと里美公太^{さとみこうた}は人生の中で最も緊張していた。

静まり返った屋上で、思春期の男女が二人きりで向かい合っている。

聞こえるのは、風の音と微かな生徒の声と、そして俺の心臓の鼓動。

神々しくも切なく輝く夕日をバックに、俺は目の前の彼女に告白した。

了承を得るために差し出した右手。

角度、スピード、タイミング。まるで計算し尽くしたかの如くしなやかな動き！

それに加えて俺の表情。

恐怖、期待、緊張、その全てに堪え、必死に真剣な顔を作り出す。俺は本気だとの意思表示を視線で行う！

さぞかし爽やかで、誠実な印象を与えられたことだろう！

彼女の表情はどうだ！？ 見てみる！ 頬が赤らんでいるではないか！

これも俺が今まで実行してきた作戦の賜物だと言えよう！ それはもう苦労したんだ！

出会いからこの告白まで、俺は様々な手を尽くした！

彼女の情報を得て、周囲の人間関係に根を回し！ 同情を誘い味方を作った！

彼女の両親から姉妹、親友に至るまで！ クラスの皆からも応援

された！

屋上に彼女を誘ったとき、クラス中から黄色い悲鳴が飛び交った！
その時の彼女は、恥ずかしそうにしながらも、期待するような視線をこちらに送ってきたほどだ！

俺、そしてクラスの誰もが、新たなカップルの誕生を確信していた！

そしてこの告白！ これで断る女子なんているはずもない！！
恥らう彼女。いやあ、焦らしてくれるぜ！

しばらくすると、彼女はおずおずと口を開いた。

彼女の第一声。それは栄光の告白了承に違いないのだ！

——さあ、答えてくれ！！

「——ごめんなさい。——あなたじゃないの」

うんうん。そうだろう、そうだろう。こんな雰囲気の中、断る女子なんて——

「——え……！？」

落ち着け、俺。何かの聞き間違いだ。そうだ、そうに違いない。

「ご、ごめん！ よく聞こえなかった！ もう一度お願い！！」

……今度こそ、しっかりと聞けぞ！！ さあ、もう一度……！！

「——ごめんなさい。あなたは違うから……」

ふふん。そうね。やっぱり聞き間違いじゃなかった……って。

「——ええ！？ ええええ……！？ ど、どうして！？」

「ごめんなさい……。さよなら——」

俺の言葉を完璧に無視し、彼女は俺に目もくれず屋上から走り去って行った。

後にはポツンと俺一人。

「……何故だ！？ こんな馬鹿なことが……！？」

まさかの告白拒否。完全に想定外だ……。

「あ、ありえないぞ！？ 一体何が起こったというんだ！？」

告白する前の彼女は誰が見たってOKだった。それなのに一体どうして!?

「俺、何か間違っていたのか!? 知らないうちに彼女の嫌がるようなことを……?」

いや、それはないはずだ! 彼女の性格、思想、趣向、人間関係や家族構成に至るまで徹底的に研究し、彼女の目を惹き、好みそうな行動をしていたんだ。

地雷を踏むようなことは決してなかったはず!

「なのに、どうしてこうなった……」

……あれ?

俺はしばらく考えて、一つ気になることを思い出していた。確か以前にもこんなことがあったような……。

あれは確か……前回の告白のときも……。

——数ヶ月前——

「俺と付き合ってください!!」

「ごめん、あんたじゃないから」

「なんですと——!?!?!」

……ってことがあったような……。

「デジャヴ、なのか……?」

そういえば最近によく女の子に振られる。

昔の俺は、言っただけだがモテモテだったんだ。

常に彼女はいたし、別れてもすぐに違う彼女が出来たってもんだ。そんな俺が、今はこの有様だ。告白しても実らない。盛者必衰ってか? やかましい!

今年に入って、なんと4連敗中。しかも全部決まって——

『あなたじゃないの』

——と言われて断られている。流行っているのか……?

「あー、また振られたか……」

ともあれ振られてしまったものは仕方ないよね。

「まあいいや！ 次の恋を探そう！」

——と口にして決意を固めた——その時だった。

「——あなたには、もう無理よ——」

俺しかいないはずの屋上に、どこからともなく凜とした声が響き渡った。

「だ、誰だ！？」

驚いた俺は声のした方へと振り向く。屋上の給水タンクの上にその姿はあった。

「あ、あんた誰だ！？ 一体そこで何してるんだ……！！？ ……つて、委員長！？」

どんな展開！？ なんで委員長があんなところに！？

俺は驚愕を隠しきれなかった。その見覚えのある彼女の名は縁朱^{えにしし}夏^{ゆか}。

我がクラスの委員長で、活発な性格と、美麗な外見で、クラスどころか学校中から人気を集めているアイドルなのだ。

だが、その彼女が何故か巫女さんスタイルでそこに立っていたのだ……！！

それだけではない！ 特筆すべきはその巫女服！

真っ黒な巫女服だって！？ そんな巫女服、見たことないぞ！？

「なんで巫女さん！？ しかも黒だと！？ …………… いや、今それはどうでもいい！！？」

どうでもいいわけないけどね。実はすげー気になってる。

「委員長、今のセリフ、一体どういうことだ！」

「その答えは——とっつ！！」

「……飛んだだとう！？」

委員長は得意げに給水タンクの上からジャンプした！

「あ、危ないって……！！」

——と、俺は注意したものの、黒巫女服をはためかせ空を踊る姿はとても美しく、つい見とれてしまっていた。……のだが——

「——ぎゃう——！」

予想通りというべきか、着地失敗。

「あちゃー……。あれは痛い……」

委員長はしばらく悶絶していたが、俺の視線に気づき、さっと立ち上がりこちらに向き直った。

「やり直しよ！」

「……何を……？」

「——あなたには、もう無理よ——」

おお、今こけたことを完璧になかったことにしている！！ なんてスルースキルだ！

……って言ってる場合じゃないよね。

「なあ、委員長。それってどういうことだ？」

「——あなたには、もう無理なのよ——」（チラッ）

「……」

……マジで最初からやるのかよ……。

「……」

「……………」（ウルッ）

いや、そんな涙目にならなくても……。どれだけ恥ずかしかったんだよ……。

仕方ない、少しだけ付き合ってやるか……。

「なんで巫女さん！？ しかも黒だと！？ ……いや、今それはど

うでもいい！ 委員長、今のセリフ、一体どういうことだ！」

……でセリフ合ってたよね？

「どうもこうも、あなたはもう二度と恋愛することが出来ないってそう言ってるのよ」

あっけらかんと言い放つ巫女さん。いや、委員長。セリフは合ってたみたい。

バックには夕日。正直、絵になるよなあ。……着地に成功してい

ればもつと凄かったのだろうけどね。

——……いや、違うだろ俺！

今、とんでもない事を言われたぞ！？ 俺はもう二度と恋愛が出来ないって！？

「あなたはもう一生恋愛することが出来ない」

「一生って……。もしかして死ぬまで？」

「そ。死ぬまで」

言い切られた！？ 納得いかんぞ！？

「なんでだよ！ どうしてお前にそんなことが分かるんだ！？」

「見えるのよ。私には——」

薄っすらと笑みを浮かべる巫女さん。目には涙が浮かんでるけど。やっぱり痛かったんだなあ……。

でも全力で耐えている。こけて打った場所をちよいちよい気にする姿が実に可愛い。

黒巫女服も間近で見ると迫力あるね。うん。とても似合ってる。

しかも良いにおいがするし！

ショートヘアも意外と巫女服とマッチしてるし。

薄っすらと膨らむ胸も——……。うん。こっちはまあまあかな……。察しよう。

思わず顔を緩めてしまう俺。しょうがないよ。だって可愛いんだもん。

……って俺はこんなときに何考えてるんだ！ 今はそれどころじゃないだろ！？

でも可愛いデヘヘ。

「——ってこと」

「……フ……フオオオオオ……」（葛藤中）

「ねえ、ちゃんと聞いているの？」

「もちろんさ！」

嘘です。半分くらい聞いてませんでした。

「そう。じゃあ話を続けるわね。それで私には人の“主人公時間”

をすることが出来る能力があるの」

へー、見ることが出来るんだ！。すごいねー。

「……………って主人公時間って何よ！？」

「主人公時間っていうのは、文字通り人生の間で主人公になっていられる時間のこと。主人公時間は誰もが持つていて、その間とはとにかく異性にモテるの。でもあなたはその主人公時間を——」

な、なんとなく次のセリフが分かるぞ。もの凄く嫌な予感。

「——全部使い切ってしまったの」

「なんだって—————！？」

予想通りすぎるー！！　今までモテモテだったのはそういう理由だったのか！？

……………って、おいおい待て待て落ち着け俺。まだ慌てる様な時間じゃない。

いくら可愛いとはいえ、このこの巫女さんの言うことを信じるってのか？　そんなオカルト無理があるぞ？

「……………なあ、その主人公時間って、本当にあるのか？」

「あるわよ。現実にあなた、たった今振られていたじゃない」

「なぬ！？　お主、見ていたと申すか！？」

「ええ、惜しかったわね。主人公時間中だったら、間違いなくお似合いのカップルになっていたでしょうに」

チクショーっ！　やっぱりそうだったのか！　お似合いのカップルだったなんて……。なんてこったい！

「ちなみに、過去3回全部見てたわ」

「なんだって—————！！」（二回目）

なんかストーリーカーマがいだな！　でも可愛いから許しちゃう不思議！！

……………二度目の絶叫。さつきから叫んでばかりだな俺！　喉痛い……。

「それに全てこう言われてたでしょ？　『あなたは違う』ってね」「何故それを！？」

凶星だった。過去全て例外なくそう言われていたのだ。

「これはね。あなたは主人公とは違うって、そういう意味なのよ？ ヒロインはいつだって主人公と恋実るものでしょ？」

そうか。だから今まで同じセリフで振られたわけね！ なるほど、納得！！

「……………するわけがなからう！！ すると俺はもう一生恋愛が出来ないうてのか！？」

「……………なあ、どうにかなる方法はないのか？」

俺はすぐりつくような目線を委員長に向ける。

「ないわ」

「即答！？」

視線すら合わせてくれない！？ 血も涙もねーのか！？

「……………ダメだ……………もう死のう……………」

「——と、言いたいところだけど、……………って、聞いてる？」

委員長が何か言ってたみたいだけど、俺はすでに現実から逃避していた。

「もうダメなの！ 一生童貞なんて、ボクには耐えられないの！」

「あー、もしもし？」

「もうボクに構わないで！ もう決めたの！ 死ぬの！ 飛び降りるのよー！」

「……………」（イラッ）

「いやあ！ 止めないで！ ボクを止めないでえー！」

「……………いい加減にしないと一生童貞にするわよ？」

「すみませんふざけすぎましたゆるしてください」

一気に現実に戻されたぜ……………。死ぬ気なんてありませんよ？ ちょつとふざけただけです……………ん？

「『と、言いたいところだけど』ってことは……………もしかして続きがあるの？」

「あるわよ！ 聞くの！？ 聞かないの！？」（イラッ）

「聞きたいに決まってる！」

朱夏「次ふざけたら一生童貞だから」（ニツコリッ）

委員長は笑顔ながらも眉毛を引きつらせていた。笑顔が怖いとはこのことだ……。

そんなに怒らなくてもいいじゃない。ぐすん。

でも怒った顔も可愛いなあフヒヒ。

「あなたはこれから脇役として生きていくのよ」

「……脇役、だって……？」

「そう。物語には必ず必要となる脇役。それをこれから演じていくの」

「どういうこと？」

よく判らん……。

「あなたはすでに主人公時間を使い切った。つまりあなたには主人公になる力が残ってない。それでも主人公になりたい。そう思うなら方法の一つ。他者の物語に入って脇役を演じること」

「他者の物語？ 脇役を演じる？」

「主人公の人生に大きく影響を与えるような名脇役は、それなりの力を得ることが出来るわ」

「つ、つまり……どういうことだってばよ……」

俺の頭上には“？”マークが大量に浮かんでいることだろう。

「簡単な話、他者の物語に入り込んで活躍し、人気者になればいいってこと」

「人気者になると、どうなるんだ？」

「例えばドラマの脇役が人気になれば、その脇役を主人公にしたスピンオフ作品が作られることがあるでしょ？ それと同じことね」

ふむ。なるほど、実に分かりやすい。

「判った。でも一体どうやって脇役になればいいんだ？」

「これから主人公時間を迎える人と仲良くなって、恋愛の手伝いをすればいいの」

「そういうことね」

よくあるパターンで安心した。……よくあるのか？

「他者の物語にどんどん入って活躍すれば、いずれスピンオフが作られるかもしれない。でも、それはとても大変なことよ？ 主人公の期待、信頼に全力で答えないといけないのだから。あなたはどうする？ やってみる？」

——どうやら俺の主人公時間はもう無いらしい。このままだと一生独身だつて！

そんな人生はまっぴらご免だ！

ならば答えはひとつしかないだろう！

「やるに決まってるんだろ！ 名脇役になってやるぜ！」

なんとしても主人公に戻ってやる！

それに脇役ついても、ただ恋愛成就の手助けをするだけだ！

なんてことはない！ ……はず！

……ん？ 不意に疑問が俺の脳裏をよぎった。

「なあ、なんで俺に主人公時間がないこと、教えてくれたんだ？

お前にとつてはどうでもいいことだろう？」

「ええ、確かにどうでもいいわ」

……なかなか辛口な巫女さんだな。そこがまた味がある！

「でも、あなたには興味があるの」

「俺に興味！？」

うはっ！ 久々に俺の青春が来たか！

「あなた、色々と雑用してくれそうだからね」

……そういうことね。まあ期待はしてなかったよ。何せ主人公じゃないもんね……。

「私は縁結びを司る神様の巫女なの。我が家は代々縁結びの神様を奉っていて、神様の手伝いをするのが仕事なの。でもね、最近仕事に滞っちゃって。一人では限界を感じたから、あなたに手伝ってもらいたい。それがさつき言った『脇役を演じること』。それであなたは主人公に戻る。私も楽できる。一石二鳥だとは思わない？」

「なるへそ。そういうことだったわけね」

ふーむ。要するにバイトみたいなものか。給料はお金の代わりに
主人公時間。

「では来週から行動開始よ！ 手順や注意事項はその時に伝えるわ」
告白失敗、衝撃の事実から一転、この急展開。

いやあ、人生ってどうなるか分からないものですねえ……。

そんな俺の人生よりも、一つ気になっっていたことがある。

「ところでさ、何で巫女服着てるんだ？ しかも何故黒？ 神様に
仕えているからとか、なにか複雑な理由が？」

「——ただの趣味よ！！」

「なんだって————！！」（三回目）

二度あることは、やっぱり三度あったね。三度目の正直なんてこ
とわざは知らん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7768y/>

すぴんおふ！

2011年11月23日05時47分発行